

平井和正 + illustration 泉谷あゆみ

立読み  
読み

地球樹の女神 コア・ストーリー

CRYSTAL CHILD

クリスタル・チャイルド

DIGITAL  
NOVELS

LUNATECH

## 目次

第一章	異界の扉
第二章	龍の棲む家
第三章	闇のラビリンス
第四章	バリアー失せるとき
第五章	パラワールド・シャッフル
第六章	深淵から
第七章	ウインドー
第八章	闇よりも暗く
第九章	精神寄生体
最終章	収斂

最後にその妹伊邪那美命、身自ら追  
ひ来たりき。ここに千引の石をその黄泉  
比良坂に引き塞へて、その石を中に置き  
て、各對ひ立ちて、事戸を度す時、伊邪  
那美命言ひしく、「愛しき我が汝夫の命、  
かく爲ば、汝の國の人草、一日に千頭絞  
り殺さむ。」といひき。ここに伊邪那岐  
命詔りたまひしく、「愛しき我が汝妹の  
命、汝然爲ば、吾一日に千五百の産屋立  
てむ。」とのりたまひき。ここをもちて一  
日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人  
生まるるなり。故、その伊邪那美命を號  
けて、黄泉津大神と謂ふ。

『古事記』「6 黄泉の国」より

第一章



異界の扉

輝く水晶クリスタルのペンダント・ヘッドが、眩まはゆい光芒を周囲に振りまきながら、くるくる回転している。

それを瞬きもせず凝視していると、いつしか脳裡に白い霧もやが生じて、不思議な異界へ全身ですうつと吸い込まれていきそうになる。

夢なのだ、とわかっている。水晶の錘おもりの燦きらめく回転は、現実に起こっているものではない。いつもの夢なのである。昔から、何度も何度も繰り返し見た夢が、今も後藤由紀子を捕らえている。

夢の中でも、振り子ペンデュラムを回しているなんて、妙なことだ、と由紀子は考えている。だが、振り子は自分の意志をもつて回転しているのだ。由紀子自身が回しているのではない。意志を持つ振り子が、由紀子に何事か指し示そうとしている。美しい水晶の振り子は、由紀子の神霊能力の分身なのだ。振り子の教示は、とても悪いことが由紀子に迫ろうとしていることをあかしているが、なぜか少しも恐怖を覚ええない。

壁に遮られた曲がり角を曲がると、誰かが自分を待っている。その誰かは、由紀子に凶運をもたらそうとしている。それは苦難の道の始まりだ。これまで平穩だった後藤由紀子の人生に、暴風が吹き荒れようとしている。

それでも、由紀子は不安に怯おびえたりはしない。恐れることはない、と囁ささやく声がどこかでする。そんなことはさしたることではない。どこまでも平坦な、平穩無事な人生を

歩めると信じることのほうが、どうかしている。

由紀子は、眠った嬰兒えいじのように優しく平穏な世界から、暴風の荒れる世界へと出ていこうとしている。その瞬間が、今訪れたことを、水晶の振り子はきらきらと眩い光を振りまきながら、教えているのだ。ただ、それだけのことだ。

\*

目をあけると、大きな姿見の中に、変身した自分の姿が映っているのが見える。

白衣をきつちりと着付け、胸高に帯を締め、燃えるような緋色ひの袴はかまをはいた由紀子自身の姿である。それはあまりに日常感覚と遠ざかった、異次元感覚である。もはや女子高校生の自分は存在を止めている。そこにいるのは、古式な神道に使える巫女みことしての、装束を身につけた、異形の自分だ。



そうだった、自分は 野、 宮市の母親の実家を訪れているのだ、と得心する。

母親の亜由子は、 野神社の巫女出身である。その縁で、自分も巫女の装束を着せられているのだ。

意識が鮮明化すると、大きな姿見の中の、巫女装束の自分がひどく大きな黒い瞳で凝然と由紀子自身を見返していることに気付く。

まるで見知らぬ他人が巫女の装束をつけて、そこに立つ

ているようだ。その感覚が強すぎて、現実感が希薄になる。不意に頭が鈍く重く、身体に変調が生じていることを意識する。しばらく前から起こっている変調だ。変に気鬱になり、身体が重く感じられる。何かしら霊サイキカル的なものだとわかつている。まるで強い水圧でも全身にかかっているように、憂鬱である。

「どうしたの？」

と、母親の亜由子が問う。

「とつても綺麗よ。よう似合うわ」

宮出身の母は、実家に戻ると、野の訛なまりが出てくる。東京に二十年過ごして、普段は訛は目立たないが、当地では直ちに復活してくる。

そうだ、母親に教えて貰いながら、巫女装束をつけていたところだったのだ……

まるで夢からゆっくり覚めてくるような心地がした。この意識の多重構造型は、後藤由紀子にとっては、珍しいものではない。現実が、虚構のように感じられるのだが、それは彼女の「クリスタル・チャイルド」性と分かちがたく絡まりあっていることだ。

「また、ビジョンなの？」

母が声を低くして尋ねる。ビジョン それは天啓の一種なのだが、現実における視野に、サイキカルな映像が重なってくることである。霊的な視野、それがビジョンだ。「見てみたい……ばかみたいだったでしょう？ ぼうつ

として」

由紀子がすこし照れていう。日常茶飯事として、靈的な視野を持つわけではないが、ビジョンが突如として訪れた時、由紀子は超現実の中に入り込んでしまう。現実から切り離されて、人声も聞こえず、目の前にある光景も見えなくなってしまうのだ。

「ゆっちゃんが別人みたいになるから、すぐわかるんよ」と、母の亜由子は完全な野訛でいう。

「白痴みたいになったでしよう？」

「ううん、神秘的だった」

惚れ惚れと母親は、我が娘の巫女装束姿に見入っている。「どんなビジョンだったの？」

「水晶の振り子が回っていた……」

「それが何か？」

「悪いことが起こるかもしれない……」

そこまでいって、由紀子はとっぜん気がさしてきた。口に出す言葉に気をつけなければならないのだ。彼女の発する言葉に大きな関心を抱いている人々が沢山存在する。

「悪いことって？」

「わからない。そんな気がただけだから。きっとたいしたことはないでしょ」

由紀子は言葉をそらした。余計なことを口走ったことを後悔していた。

「教授」に相談してみたら？」

いつもものにこだわらない性格の、母親の亜由子が、なぜかこだわっていた。この母親にも自分によく似た力があることはわかっている。直感力、洞察力はあるいは由紀子を凌ぐかもしれないのである。

「東京の『教授』にどうやって相談するの？ 電話をかけたも、『教授』は送受機を外せないんじゃない？」

軽口を叩くことで、母親の追及をかわした。もう幻影のもたらず、悪しき感覚は消え去っていた。悪い予感、といったところで、別に珍しいことではない。未来に待ち受けているのは、いつもいつも順調な人生ばかりではない。

曲がり角の向こうを、常に恐れているわけにはいかなかった。

「で、どうするの、これ？」

由紀子は話題を変換しようとして、白衣と緋の袴の巫女装束に目を落とした。

「これを着て、記念写真でも撮るの？」

「ううん。そうじゃなくて、ただお母さん、ゆっちゃんに着せてみたかっただけ」

「ママ、若い頃のこと思い出して、感傷に浸ってるんだ」

「もう脱いでいい？」

「せっかくだから、もう少し着ていたら？」

「だって、これ窮屈なんだもの」

「きりつとして、神秘的で、とってゆっちゃんに似合うわよ。生まれながらの巫女みたい……」

「もういいでしょ？」

「せっかく着付けたんだから、記念写真撮ろう、ね？」

亜由子が小さな全自動カメラをハンドバッグから取り出す。カバーがスライドして、内蔵されたレンズが貌かおを出すと、赤いランプが発光した。ちかちかと瞬いている。

「撮るわよ、ポーズつくって」

ストロボが発光した瞬間、何かが由紀子の脳裡をよぎった。それはフラッシュの素早さで閃ひらめいた記憶の残像だった。由紀子はこの白衣と緋の袴の巫女装束のまま、どこか別の場所にいた。

それは、記憶の錯誤としかいいようのないものだった。由紀子が母親亜由子の実家に来て、母親のかつてつけた巫女の装束を身に纏まとったのは、これが初めてである。

それなのに、確かに同じ巫女の姿になった記憶が、脳裡のどこかをよぎったのだ。

\*

夜闇おひただに、勢いよく火炎が躍り上がっている。

夥おびただしい熱気が放射され、押し寄せてくる。夜闇の中の炎には、特別の生命力を感じさせるものがある。

一瞬一瞬、姿かたちを変えていく火炎は、多元宇宙世界を象徴しているようだ、と由紀子は感じる。それらの無数の形は、どれひとつ同じものはない。

井桁に組まれた木材が、力強い炎を吐き出している。夜の天空に向かって伸び上がる火炎の強烈な生命力が、由紀子の裡にも入り込んでくるようだ。

躍る炎を見ると、由紀子はいつも奇妙に心楽しくなった。温かいものが身裡に溢れ出した。幼い頃から炎を恐ろしいと思ったことは一度もない。親密な感覚に魅せられるのを覚えた。とりわけ焚き火や暖炉に躍る炎が大好きだった。

昔から、我が家に暖炉がないことを、いつもうらみに思ってきた。暖炉があれば、炎の親しさや懐かしさに引き込まれて、一日中でも飽かず見入ってしまうだろう。

護摩祈願の大きな火炎が夜空に向かって躍り上がる勇壮、豪快な光景は、強い印象を由紀子に植えつけた。巨大な変化が訪れて、自分をすっかり変えてしまうのではないかという気さえした。

そう、この護摩焚きは、“さんらいず”の乗客乗員六千名の安全無事を祈願して行われているのだ……

ゆっくり記憶が戻ってくる。それまで完全に失われていた記憶が蘇るのに似ている。由紀子の記憶には、いつもあんな種の混乱が付きまとっているようだ。デジャビュの頻度があまりに高いからである。いつも現状を認識することは、過去の記憶を呼び戻しているような、錯覚がある。

前に経験した出来事が、またしても繰り返されている。この護摩祈願の盛大な行も、以前にそっくり経験したような気がする。夜空を焦がして躍り狂う、大きな火炎の豪快



さも味わうのは今が初めてではない。

そんな確信が心にしつかりと座を占めている。それがデジャビュという不可思議な体験の特質なのだとわかっていながら、由紀子にとり、現実とはいっても何度か繰り返されているような気がしてならない。

護摩祈願の修験者たちの貌が激しい炎の照り返しを受け、朱を塗りたくったようにぎらぎら光っている。手印をつくり、九字を切ったりする激しい動作が、火炎の躍る勇壮な雰囲気を更に盛り上げる。

般若心経の読誦どくじゆが闇の底から湧き起こる。多数の参拝者の口から一斉にあがる般若心経の読誦は、神秘的に過ぎ、奇怪な響きを帯びて、海鳴りのようだ。後藤由紀子のような年若いものにとっては、理解を絶する経文の響きは、荘厳さよりもカルチャー・ショックをもたらすものだ。

超大型豪華客船「さんらいず」の失踪は、世界的な衝撃波となって日本を揺るがせる大事件だった。世界最大の海難事故が突発して十日後、野・玉姫山において、跡形もなく消え去った六千名もの乗客乗員の安全無事を祈願し、彼らを呼び戻すための護摩焚きが行われている。

玉姫山の山上近くにあるため、さして広くもない玉姫神社の境内に集った群衆は、今にも溢れ出して、切り立った崖の下に今にもこぼれ落ちそうだ。

玉姫山は標高1070メートルもの高山である。夜ともなれば、月光は目を射るように眩く、境内に蝟集いしゅうした参



拝者たちを照らし出す。彼らが一斉に唱える般若心経の響きは、地底から湧き上がってくるマグマの轟きのようだ。

その般若心経の波動に身をまかせていると、由紀子はまたしても現実と非現実との間の皮膜が消失していくのを感じる。強い吸引力が働いて、彼女を現実から誘い出してしまおうのである。

踏み止まろうとするが、その努力は必ずしも快くはない。酩酊現象にまかせているほうが遙かに安楽なのだ。

そうだ、お母さん、と由紀子の思念がゆっくり舞い戻る。ここには、母親の亜由子とともにきたはずだ。母の運転する車で、玉姫神社の駐車場まできた。この駐車場は、玉姫山の神様のおいになる場所よりも、高い位置に造られたので、道路をつけた高名な政治家以下、関係者は数年の間に他界することになった、と母親の亜由子はいった。

「玉姫山の神様は、とてもきびしい神様なんよ。大昔から、ずっと隠されてきた神様なので、人間の欲による穢けがれがないの。だから、純潔。ゆっこちゃんのように」

「玉姫山の神様って、女神様なの？」

と、由紀子は尋ねた。玉姫神社は、野三山の神社とはまったく違う、と母の亜由子は答えた。

「智にしても 玉にしても 宮にしても、玉姫山とはぜんぜん雰囲気が違うでしょ？ ごく普通の神社という感じで……でも、玉姫山は違う。本当に神様がおいになることがわかる」

「ママは、お巫女さんだったから」

「ゆっこちゃんにもわかるはずよ。神霊能力があるんだから」

「そうかな？ あたしにも神霊能力があるのかな？」

「あるにきまつてるじゃない。だから、世間様から『クリスタル・チャイルド』なんていわれてるんでしょう」

「だって、あたしはそんなふうに、自分が特別な存在だなんて思えない」

「神様から、特別な力をお預かりしているのよ。だからこそ、超天才少女とか『クリスタル・チャイルド』といわれるわけでしょう？ ゆっこちゃんのように、知能指数が800とか1000とか、計れないほど高い子供は世界中に何人もいないわ」

「だって、あたしは自分が利口というよりは、どっちかといえればかで、頭が悪いという気がするもの。『教授』だって、あたしのことを天才なんていわないし」

「『教授』は、ゆっこちゃんのことを、それ以上の存在だと思ってるのよ」

その会話は、由紀子が姿見の前で、白衣と緋の袴に着替えて、巫女装束を身につけた時になされたものだった。由紀子は己れの変身ぶりに、衝撃を受けた。母親の亜由子が若い時分に 野神社の巫女として仕えていた頃の巫女装束を、興にまかせて着付けてみようと思いいたなかつたら、この不思議な時間感覚の擾乱じゆうらんは起こらなかつたかもしれ

ない。

時間は突然、奇妙な二重性を具えるに到った。

それは空間に置き換えると、視野が二重に見えはじめる感覚であった。目の前の現実と、異質な視野が二重に重なるのである。決して、正気を失ったわけではない。だが、現実感覚をもたらず時間とは、異質な時間がもうひとつ重なってくるのである。

その両者を区別することに困難はまったくない。どちらが、現在進行中の現実であるか、明確に区別することができる。

“教授”が、前に由紀子にいったことがある。

時間は、あざなえる縄の如し、と。

決して、人間が普通感じるように、単一の時間が上流から下流に向かって流れるようなあり方ではない、と“教授”はいった。

時間は、人間の感覚のみならず、意志という存在とも不可分の関わりを持つ。

“教授”の言い方は難しく、由紀子の理解力を超えていた。

もしかしたら、自分の思いどおりになるという意味かな、と由紀子は思った。

人間は、自分の思いどおりに時間を操っていることに、気づかないでいる、と“教授”はいつているのかもしれない。

だとすれば、時間とは、人間の数だけあるのだろうか。人間はだれしも、自分の思いどおりの時間を織りなしているのか。

だとすれば、人間はどうして、自分の思うがままの人生を送ることができずにいるのだろうか。挫折や失敗の悲哀を味わわなければならないのだろうか。

もしかすると、だれかが邪魔だてしているのかもしれない。人間が思いどおりの人生を送れないのは、妨害されているせいかもしれない。人間の目に見えない悪魔のような存在が、どこかに隠れていて、こっそりと時間の流れを乱しているのではないか。

同じようなことを、自分は前にも考えたことがある。デジャビュというのだろうか。確かに前にも考えた。そして同じ結論に達したことを、覚えている。たった今、それを思い出したのだ。

だが、なぜ忘れてしまったのだろうか。最初から存在しなかったように、完全に忘れていたのだ。

もしかすると、強制的に忘れさせられていたのかもしれない。やはり悪魔のような存在がいて、記憶を巧妙に自分から奪い去ってしまった、そんな気がする……

\*

人込みの中にいる間中、ずっとだれかの視線を浴びてい

る感じが付きまどっていた。由紀子のような少女が巫女装束を身につけているのだから、群衆の視線がへばりついてくるのは当然としても、それだけではなかった。

特別な強い視線だった。人々のそれが淡い薄日のような感じであるとするれば、揺れ動く木漏れ日がまともかおに貌かおに当たるほどの刺激があった。いやでも視線を意識せずにはいられない。ふつと振り向くが、そこにはもう視線が存在しない。由紀子の反応をあらかじめ察して、目をそらしてしまうのだ。

何度か試みるうちに、一度だけ視線を捕まえた。だが、それは人込みの中のこと、相手が若い女の子だという印象を残すにとどまった。

熱心に自分を見つめている視線ではあったが、あの貌かおに痕あとが残るような、特別な強い視線ではなかったという気がした。

視線の主は、由紀子と同世代の、若い女の子だった。かわいい黒い瞳が残像となって残っている。あまり熱心に見つめていたので、気がさして、隠れてしまったのだろうか。それが気になって由紀子は何度も、視線のきたあたりの人込みを探したが、視線の主とおぼしい女の子の姿は見出せなかった。

みないい年をした大人ばかりで、若い人々はほとんど見当たらない。由紀子自身が目立ってしまうのは、おそらくそのためだった。

\*

夜の玉姫山の上空を、護摩焚きの火炎が赤く染めている。雲に炎が照りはえているのだった。

夜の護摩祈願には、特殊な迫力がある。人々の心にも、熱気が感染したようであった。夜の玉姫山に参集した全員が般若心経を読誦する声音は、地底のマグマが轟くような迫力を生んだ。躍る火炎の投げ掛ける真紅の光を浴びた群衆は、不可解な夜の存在に変身していた。たとえそれが日頃、よく知っている知人だとしても、まったくの別人に化してしまっている。

それは、夢の感覚そのものだ。現実が正常なパースペクティブを喪失し、異形の姿を顕す<sup>あいつわ</sup>。知り尽くしている町並みが、見知らぬ異郷そのものと化している。空気までが馴染みのない、異質な肌触りを伝えてよこす。

由紀子にとっては、現実がそのまま異界と化す感覚は、常に付きまとうものである。自分は、やはりこの世界に帰属していないと感じる。自分はどこか遠い異郷から、何か理由がわからぬままに、この世界に紛れ込んでしまった異邦人なのだ。

自分はここで、ある人に逢う、と由紀子の脳裡にふつと思念がよぎった。それは前から決まっていたことだ。ずっと以前から、由紀子はそれを知っていたような気がする。

この盛大な護摩祈願の火炎が、頭上の空の雲を焦がす夜、自分はその人と逢う。

予知ではなくて、自分にとってつきもののデジャビュなのかもしれなかった。いつも、同じことが過去にも起きたような気分が付きまとうのだ。単なる心理的な錯覚だと思っていた。だが、今由紀子を訪れているのは、錯覚などというレベルのものではなかった。それは確信の域に到達していた。

それは、必ず起こる。避けることもかわすこともできない。その逢うべき人は、今由紀子の間近にきているはずだ。この護摩焚きの炎の熱気に、由紀子と同じように曝さらされている。周囲をぐるりと見回せば、その人の姿、顔かたちが今、この瞬間にも目に入るかもしれない……

母親の亜由子があたりに見えない。雑踏の中を抜け出して探そうとすると、腕をだれかに取られた。

「あ、そこ危ないですよ」

若い女の子だった。あの子だ、と直感が走り抜けた。人込みの中で自分を見つめていた視線の主だ。しかし、あの独特の強い視線の持ち主とは、また別人である。

小柄な女の子にしては、思いのほか力持ちだった。しっかりした手で、由紀子の肘ひじを支えてくれている。

「どうもありがとうございます……」

人が周囲に溢れていて、玉姫山の神社の境内は暗く、足元はさほど平坦ではなく、不確かだった。

「その巫女さんの着物、似合いますね」

相手は自分と同じ年恰好かっこうの少女だった。私服を着ているが、高校生のようだ。黒くまるい瞳が生き生きしてかわい。何かいいしれぬ親しみが湧いた。その黒い瞳には由紀子を強く惹きつけ、魅了するものがあつた。

「そうですか、ありがとうございます」

「後藤由紀子ちゃんでしょ？ “クリスタル・チャイルド”の」

「なぜわかつたんですか……」

「わかりますよ、すつごく綺麗なもの」

「ありがとうございますってよいのか……」

「この世のものとも思えないくらい美しいです」

本気でいっているのがわかつて、由紀子の心にその賛辞はしみた。不思議な感動が存在した。

「由紀子ちゃんはこの玉姫山、初めてですか？」

「いえ。小さい頃に確か一度きましたけど」

「ここ、煙がきて焦げ臭いですよ、こっちにきて」

機敏な手に導かれて、由紀子是人込みの中から抜け出した。海鳴りのような般若心経の読誦はいまだに続いている。

「トイレですか？」

「いえ。母の姿が見えないものだから、探しに」

「さつき社務所のほうへいったみたいですよ」

社務所へ向かう坂道は狭かったが、人気は乏しくなった。初めて逢った少女と歩いていることが、不思議な感覚を誘

った。少女は、現地の人ではないように思えたが、玉姫山のことを知り尽くしているようだった。

「あたしのことは、修羅と呼んでください」

少女は、由紀子の心を読んだようにいった。

「東京からきました…… 野ってめっちゃめっちゃに遠いんですね。8時間かかりましたよ。それも新幹線と特急の乗り継いでですからね。〃さんらいず〃 搜索の護摩祈願がなければ、東京から気軽にこられるとこじゃありませんね」

「修羅さん、というんですか？」

「へんですか？ あたしのせいじゃないですけど。つけたのは両親ですから」

美少女修羅はそういつて、くすつとかわいく笑った。なぜか、その笑いに由紀子は心樂しさを誘われた。

「どうして、あたしのことを知ってるんですか？」

「だって、由紀子ちゃんは有名人ですから。どこにいたって、すぐにわかりますよ。光ってるから。〃クリスタル・チャイルド〃だし」

「その〃クリスタル・チャイルド〃っていうのは、他人様がつけたんですよ。わたしは、自分がそうだななんて思っていますから」

「でも、綺麗なネーミングですよ。あたしは好きです、その言い方」

「それはそうですね……」

本当は、由紀子も気に入っていた。その言葉を耳にする  
と、雪洞のようにぼうつと底から光っている暖かい、とて  
も大きな水晶がイマジネーションの作用で、目に見えてく  
る。その水晶は、途轍とてつも無い巨大な結晶体で、到底現実には  
存在しないようなものだ。

「〴〵さんらいず」の三星客船に頼まれて、護摩祈願に参加  
したんですか？」

由紀子の肘に添えた手を放さずに、坂道を誘導しながら、  
美少女修羅が尋ねた。

「赤城専務って、由紀子ちゃんに〴〵さんらいず」搜索を依  
頼してるんでしょ？」

「知りませんよ。そんな話、聞いていません」

「でも、事務所のマネージャーのところへ、話がいつてるは  
ずですよ。由紀子ちゃんがまだ知らないだけじゃないです  
か？」

「マネージャーといっても……うちの父ですから」

「〴〵さんらいず」の搜索、引き受けるんでしょ？ お得意  
のペンデュラムで……由紀子ちゃんの振り子占い、90%の  
高率で当ててるって聞きましたよ」

「そんなに、しょっちゅうやるわけじゃないんですよ。へ  
んなことが知れ渡って、迷惑してます。あたしは占い師で  
もないし、靈感者や超能力者でもないんですから」

「でも、〴〵クリスタル・チャイルド」でしょ。振り子のや  
り方、〴〵教授」に教わったんですか？」

驚きの念が、喉をこわばらせて、由紀子はちらつと横目に美少女修羅の顔を窺った。とたんに足元がお留守になり、躓つまずいて美少女の力強い手でぐいと支えられる。

「危ない。本当に由紀子ちゃんって、側についててあげないと、すぐに躓つまずいたり何かに突き当たったりしそうですね」

「よく転びますよ。いつもぼうつとしてますから。身体じゆう、あちこち痣あざをこしらえています」

「側についていても、気が気じゃないですよ」

「すみません。あたしといっしょにいると疲れるって、よくいわれます」

「お守もりが要りますね」

肘を支えていた美少女の手が、由紀子の手を握りしめてきた。びっくりしたが、嫌な感触ではなかった。由紀子には、他人と肌を接触させる機会はほとんどない。戸惑って緊張してしまいそうなものだが、そうはならず親密感が増大した。

由紀子は、特別な育ちのせいもあり、幼い頃から同性の友達が乏しかった。そのために、いつも同じ年恰好の少女たちとの間に、透明な垣根を意識してきたのである。

「由紀子ちゃんに引き合わせたい人がいるんだけど、会ってみませんか？」

いきなり美少女修羅がいった。

「ごめんね、唐突で。でも、由紀子ちゃんここで会えた

のも、玉姫山の神様の神縁だと思っから。是非とも由紀子ちゃんに引き合わせたいの」

「どんな人なんですか？」

つい由紀子は興味を引かれた。相手の美少女があまりにも魅力があるので、引き込まれてしまったのかもしれない。美少女修羅が紹介したいという人物よりも、修羅自体に興味があった。

「だめ。言葉ではとつてもいえない。ただ、物凄く不思議なひとだつてことは確か。表現できないくらい魅力があるひと」

「なんだか、こわい」

「会つてみる？」

知らないうちに、うなず頷いていた。警戒心はまったく起こらなかった。美少女修羅に手を握られていると、自分がどこまでも防御を失つていくようだった。

「どこへいくんですか？」

「石。この山道をずっと上のほうまで登つていったところ。玉姫山の山上に近いの。石神社があるのよ」

「紹介したいという人は、そこにいるんですか？」

「そうよ。ついてきて」

でも、母が、とは言えなかった。すっかり比重が異なつてしまつていた。美少女修羅の誘いは、それほど甘美なものがあったのだ。

夜の山道には照明というものが一切なかった。美少女に

手を引かれていなければ、由紀子は何度も躓いて、確実にこけたであろう。修羅と名乗る美少女は、動物のように夜目がきくようであった。真つ暗な山道を、躊躇う気配もなく、ぐんぐんと登っていく。

どこまでも続くような、長い急勾配の山道で、由紀子は息が弾んだ。空を焦がすような護摩焚きの明かりも今は見えず、般若心経の大勢の読誦の響きも微かになり、ほとんど聞こえなくなつた。

まるで悪い夢を見ているような感覚が襲ってきた。恐怖感を持って当然だったが、美少女のしつかりした手の強い把握が、それを食い止めていた。修羅という限り、何の心配もないという信念が、由紀子の心に居座っていた。

何十分、あるいは何時間山道を登り続けたのか、由紀子には判断がつかなくつた。闇の中の山道には、時間感覚を失わせるものがあつた。暗闇の中に、朧おぼろげ気に鳥居が見えたような気がした。

錯覚ではなく、確かに鳥居だつた。鳥居を潜ると、由紀子は息を切らして平坦な地面の上に立っていた。

「ここはどこ？」

自分の声音が、夢の中の世界から漂ってくるようだつた。「石神社です。詣でたことないんですか？」

「ええ。知らなかつた……水の匂いがする。溪流がありませんね？」

「溪流？ そんなのありませんよ。ここは玉姫山の頂上近

いんです。標高千メートルぐらいあります。玉姫山は高山ですからね」

「でも、ほんとに水の匂いがする」

水の流れる音まで明確に聴きとれた。これも幻覚だといふのだろうか。

「霊覚ですよ、きつと。霊覚が働き出すと、ぜったいに聴きとれないはずの、遠方の音や匂いまでわかるようになるんです」

「霊覚？ 霊的感覚のことですか？」

「由紀子ちゃんは“クリスタル・チャイルド”ですからね。この石は、玉姫山の神霊波動がいちばん強い場所なんです。世界の中心 地球の臍へそなんですよ。物凄く強大な大自然のエネルギーが還流しています。大霊能者ほど感応が激しくなるんです」

「水の匂いがするのは、そのため？」

「他に何か感じますか？」

「何か聞こえます……小さな子供の声みたいなの」

「何をいつているか、わかります？」

「笑ったり叫んだりしてるみたい。とつてもたのしそう」

「男の子？ 女の子？」

「女の子。ママって呼んでます。とつても妙な感じ……」

「どうして？」

「あたしが呼ばれてるような気がして……」

にわかには気恥ずかしくなり、由紀子は話を転じた。

「あたしに引き合わせたい人って、どこですか？」

「もう待っていますよ。石の前で」

闇に白衣が浮き上がっていた。それは夜の闇が反転したような明るみを生み出していた。目が闇に慣れてきたのか、由紀子は前よりもずっと夜目がききだしていることに気付いた。

「いつてみましょう」

美少女の手に引かれて、由紀子はそろそろと白衣をつけた人に向かって近づいた。背丈が高い、と真先に感じる。ぼうつと発光するように顔立ちが見てとれた。白人の貌をしていると思った。こんなに暗くなければ、ブルーの眼が見えたであろう。年齢はわからないが、年取った貌ではなかった。力強く、端麗な顔立ちといつてもよかった。

夜目にもそれとわかるほど、光る眼差しを由紀子に向けて佇ただすんでいる。

「この石から出ている、驚くべき大宇宙のエネルギー、感じますか？」

上手な日本語である。日本人が話しているのと変わらない。それでも、微妙な違和感があった。やはり外国人が喋っている日本語だと感じさせるものがある。

「まるで竜巻のように、大エネルギーが、石から放出され、上空へ舞い上がっていきます。霊視がきく人間が見れば、ナイアガラの滝よりも凄まじい光景が見えるのです。まるで、この石から、地球全体の宇宙エネルギーが放出

されるので、地球が真っ二つに割れてしまいそうです…」

「石って、あれですか？」

由紀子は、開け放たれている木の柵の間を見た。白い玉砂利に抱かれて、大きなまるい岩頭が覗のぞいている。それは巨大な岩石のボールの一部が地表に露出したように、なごやかな曲線を描いていた。

三本の凄まじいほどの杉の巨木が、石を取り囲んで聳えている。

「この石が、異次元の扉であることを、御存知か？」

白衣をつけた白人男性が尋ねた。美少女修羅のしつかりした手の感触が頼もしかった。何が始まるのか、と気押されるものがあつたからだ。今生じている、夜の出来事はあまりにも奇矯オカシキョウだった。

「異次元の世界に繋がっているという意味ですか？」

由紀子は、言葉の上だけにとどまらず、相手が非常に重要なメッセージを伝えようとしていることを悟っていた。

「これは巨大な世界の女陰なのです。この女陰から夥しい世界の子供らが生み出されつつあります」

女陰、という直接的な表現に、由紀子はさほど感銘を受けなかった。相手の言い方が生々しくないせいもあつたであらう。

「世界の子供ら、といいますと？」

「子世界です。あなたも霊視をきかせれば、世界が分離す

るように、沢山の子世界が生み出されていくさまを視ることができるとしよう」

「よくわからないけれど、世界は単一のものではないのですか？」

「パラレル・ワールド」

と、背後で美少女が呟いた。ヒントを由紀子に与えるつもりだったのだろう。

「親の世界があつて、子供の世界が生み出されるのです。

大いなる親神から、沢山の子神が生み出されるように。古代日本の偉大な神典、古事記を読みましたか？」

「読んだことはありません。ごめんなさい……」

「日本人なら必読ですね。日本人の魂の源ですから」

行者の白衣をつけた白人男性は苛立った気配も示さずにいった。

「世界の神話は、みなそうですが、決して作り話の童話と同列の存在ではありません。人間の魂、御魂が直接理解するように記述されているのです。言葉だけ、字面だけ読んでも、決して真の理解に達することはできません。人間の日常意識から、あまりに遠い、真実の世界について語っているのですから、物質的な知識に心を塗り固められた人々は、それを浮きよばなれした、空想的な古代人の物語と頭から決めつけます。しかし、神々の物語は、神霊能力を与えられた人間、たとえばあなたのような「クリスタル・チャイルド」にとっては、直接目で見ることができます。親

神が子神たちを生み出す瞬間を、世界が分離していく光景として、視ることが可能になるのです」

相手の話についていくのは、容易なことではなかった。奇矯というより、日常の思考とあまりに異質だからだ。

「この 石から放出される、宇宙エネルギーがパラレル・ワールドを生み出すのでしょうか？」

「条件が調べば、そうしたことが起こるようになります」「今は起こっていない？」

「今は起こっていないが、間もなくそれは起こります」「どうしてですか？ 何がきっかけになるのですか？」

「この 石から発射されているのは、神霊波動です。神の意志だけが波動に載せられています。けれども、やがて人の意志が載せられるようになります。すると、巨大な変動が地球世界に生じます」

「人の意志が宇宙波動に載せられるというのは、普段でも起こっていますか？」

「それは不可能です。宇宙波動に載せられるのは、神の意志だけです」

「よくわかりません。やがて宇宙波動に人の意志が載せられるようになる、といったばかりなのに……」

「特別のことが起こるのです。この 石に深い神縁をもった人間が現れて、宇宙波動に自分の意志を載せるのです。それは神の意志の、人間としての代行者です。超古代につくられた神器を用いることにより、それが可能になります」

す」

「神器が必要なのですか？」

「神器は今現在、神により秘匿されています。しかし、やがて神器は出現し、石の発射する宇宙波動に神の代理人による意志を載せることとなります。それは、世界を大きく変えてしまいます」

「神器って何ですか？ それはつまり、意志のエネルギーを強めたり拡大したりする、霊的な増幅装置ですか？」

「その通り。さすがは『クリスタル・チャイルド』、恐ろしいほどの理解力です」

尋常ならざる賞賛をこめて相手はいった。ほとんど歓喜の念が籠められていた。

「でも、人間が神様の代わりを務めるようなことが、本当にできるのでしょうか？ 人間の意志の力が、宇宙エネルギーに載ったら、恐ろしいことが起きるのでは。それは世界を破滅させることにならないでしょうか？」

「それは、ありうることです」

「……………」

由紀子は茫然とした。相手の返答の軽さは、悪魔的すらあった。まるで、一切が冗談であった、といわんばかりの軽さであった。

「あの。お名前をまだ伺っていません……………」

由紀子の口を出た言葉は、本人すら意表をつかれるものだった。相手の名前を尋こうなどと、それまで考えてもみ

なかつたのだ。

「モリスです。モリス・セゾン」

名乗り方は、流暢じゆじゆな外国人の話す日本語ではなく、生き粋すいの日本人のやり方だった。

「フランスのかたですか？」

「先祖はそうです」

セゾン、と名乗った相手は、何かしら戸惑っていた。

「今のお話、〃さんらいず〃の失踪にも関係があるんですか？」

「ないとはいえませんが。今後、雪崩をうって、この手の失踪事件が続発するでしょう。〃さんらいず〃は、その幕開けです」

「あなたは、〃さんらいず〃の失踪に関係しているのでは？」

美少女修羅が衝撃の虜になるのが、波動として手を伝わってきた。由紀子の突拍子もない大胆さに驚愕きようがくしていた。

「この 石の宇宙エネルギーを使用して、あなたがなされたのですか？」

「それは見当はずれです。予知はしていたが、それ以上の関与は一切しておりません」

「前々からわかっていたのですか？ それならなぜ、〃さんらいず〃の乗客たちに警告してあげなかつたのですか？」

「未来を変更することになるからです。その種のごとは、

神様から禁じられています」

「でも、あたしだったら、警告していたと思います。沢山の人々の命を救えて、家族たちを苦しい思いから救えるのだったら、たとえ神様から禁じられていても……」

「さよう。あなたなら、そうするでしょう」

外国人は、何かほかの考えに気を取られているのか、緩慢な口調でいった。

「あなたには、神から特別に許されたやり方があります。神器が与えられることになるでしょう。その神器によって、あなたはみずから世界を変えることになるでしょう」

「神器？ なぜ神器があたしに与えられるのですか？ あたしは、そんなに特別の人間ではありませんけど」

「いずれ、その理由はわかります。履物を脱いで、こちらへお上がりなさい。そして玉砂利の上に坐ってください」  
「なぜですか？ なぜあたしが玉砂利の上に坐るんですか？」

「今、あなたはおっしゃったばかりです。沢山の人々の命を救えて、その人たちの家族を苦しい思いから救えるのだしたら、たとえ神様から禁じられていることでも、敢えてする、と……」

「あたしが 石の前に坐れば、沢山の人が助かるのですか？」

「約束します。必ず、沢山の人間たちが救われることになります」

由紀子はもう躊躇わなかった。段になっている石の上に履物を脱ぎ、足袋はだしになって、玉砂利の上にあがった。玉砂利のサイズが大きいので、思ったほど違和感はなかった。

「石のほうまで上がってください」

モリス・セゾンと名乗る外国人が自分は玉砂利にはあがらず、指示を下した。

「玉砂利の上に坐って、両手を 石に当ててください」

由紀子は思わず振り返った。石は貴いご神体であろう。その 石に、自分のような女の子が触ってよいのかと疑った。

「手を当てるんですか？」

「そうです」

「本当にいいのですか？」

「よいのです。早く両手を、 石の表面にあてがって 厳然と相手が命じる。」

「はい……でも、玉姫山の神様がお怒りになりませんか？」

「お怒りになるどころか、あなたをここまで呼び寄せたのは、玉姫山の神様です。あなたが巫女の装束を着ているのも、決して偶然ではないのです」

「わかりました」

観念して、由紀子は両手を延ばし、まるい曲面を持った石の黒っぽい表面にそっと当てた。

名状しがたいしんとした冷たさと、微妙な波動が手を伝わって、身体に染み込んできた。最初は、単なる冷えきった石の冷たさだけだったが、すぐに身体のみならず、意識が振動するのを覚えた。不思議な色彩が眼前に出現した。夜の闇が、目もあやなオーラに溢れた。

第二章



龍の棲む家

後藤由紀子の家の近くに、聖域である岩屋があり、そこには龍が住む、と言い伝えられている。

龍が住む岩屋には不動尊が祀られている。大きな地下水脈があるのか、岩屋の境内にはいつも水気が切れたことがない。

陰気に冷たくじめじめしていても不思議はなさそうだが、実際にはさほどの冷気は覚えない。由紀子は時折、不動尊の境内にいき、龍の住むという岩屋に向かって両手を合わせたたりする。幼い時からごく自然に信心への傾きが存在している。特に御利益を願って拜むわけではない。

ただ、神仏に合掌することに抵抗がないだけだと思っっている。拜んでいると、心が澄んできて、穏やかになる。強迫観念となって付きまとう、不安や心配ごとが消えていく。由紀子がマスコミを通じて、ジャーナリストやティックに有名な人と化してしまっってから、岩屋を訪れる機会も減った。自宅の周辺にいつもマスコミの尖兵がカメラを手に徘徊しているため、由紀子の外出は大きく制限を受けざるを得なくなっただからだ。

奇妙な霊能者と名乗る中年女性が、後藤家を訪れて、この家には龍が住む、と指摘してのけたのは、それからである。門の鉄柵を隔てた問答だったが、もしマスコミの尖兵が付近にいれば、またしてもゴシップネタにされる話題であつたらう。

立派な青龍が見える、といささか奇矯な靈感師は高揚し

た口振りで告げた。後藤由紀子ちゃんを守護しているのだから、何も心配は要らない、といわれても、気味悪さは減じなかった。特大の龍が自宅に住んでいると告げられて、平然としていられる人間はあくまでも少数派であるだろう。しかし、由紀子には龍の姿を見ることはおろか、神秘的な存在を感知することもできないのだから、すぐに忘れた。多忙な日常生活の加速感の中では、神話的な龍の存在を実感することなど不可能であった。

だが、由紀子の家には、不思議な現象が付きまとつていった。地震でもないのに、家がよく揺れるのである。あわててTVをつけてみるが、地震発生の報道はいつかななされない。もともと地震など起きなかったのだ。揺れているのは、後藤家だけで、隣接した他家ではまったく揺れていない。

それを知って、あまり気にしないことにした。ぐらつと揺れるが、家が倒壊するほどの揺れ方ではない。被害はないのだから、気にするのは無益である。慣れてしまえば、ああまたか、で済む。驚くのは、地震のような揺れが発生する時に居合わせた訪問者である。色を失うほどシヨックを受ける地震嫌いもいるから、他人からすると、相当な揺れ方をするのだろう。

だが、その揺れが、何かしら異変発生の前兆であることを悟ったのは、由紀子が玉姫山から帰った後であった。後藤家に来客があった。

それ自体は、珍しいことではない。特異にも超越的で鋭敏な知覚力の持ち主として後藤由紀子は世間に知られており、マスコミ・ジャーナリズムからは「クリスタル・チャイルド」と命名されている。

その超越的な「力」のゆえに、由紀子は霊感師や超能力者扱いを受け、芸能界や政財界の知名人たちが、さまざまな相談ごとを持ち込んでくる。由紀子にとっては迷惑なことだが、いったん名声が高まると、それはなかなか剥がれない粘着力を持つレッテルと化して、本人にこびりついてしまう。

いや、異変を予告したのは、なれっこになっている家の揺れだけではない。あの不思議な美少女、修羅もまた、後藤由紀子に予告していたのである。

「きつとびっくりするような人が、近々由紀子ちゃんに会いに来ますよ」

と、美少女は告げたのだ。

「その時になってから、脳天気な由紀子ちゃんは、自分がなぜ遠い遠い野の玉姫山なんか足運んだのか、その意味を悟ることになるんでしょうね」

美少女修羅のいった通りになった。

野の玉姫山から戻って、翌日には、思い掛けぬ訪問者の名が告げられたからだ。

「凄い霊気の立ち込めた家ですな」

そういったのは、丈高い瘦身の野性的な男だった。三十

代初めであろう。蓬髪ほうはつの髪と筋張った貌が野性味を発散させていた。

「全身がぎゅっとでかい万力で締めつけられるようだ。いや、凄い。さすがは『クリスタル・チャイルド』の後藤由紀子ちゃんの家だ」

フジ新聞社の記者荒気衛と渡された名刺にあったが、無頼な雰囲気があつてインテリやくざという感じだった。まっとうではない、裏稼業の人間にある、異質な雰囲気が、猫の舌で嘗なめられるように、肌に触れてきた。

「そうかね。わたしは何も感じないが」

そう応じたのは、三星客船の専務という肩書が名刺に擦り込まれた人物だった。頭髪が薄く、灰色がかつた汚い白髪が陰惨な憔悴しょうすいを感じさせた。側にしばらくいるだけで、ぐったりと疲労感に取りつかれる人物がいるが、この赤城という人物もそのひとりだった。

相手に生体エネルギーをこっそり奪われて、身体がうそ寒くなり、視界が冷たい灰色に変わってくる。二日も徹夜したほどの消耗感が兆すのである。

「ある霊能者のかたから、この家には守護神の竜神様がいるといわれましたわ」

と、茶菓をサーブする後藤亜由子がこだわりのない口調でいった。まるで当家には守護神の蛇がいるというような口調である。

「ははあ、竜神様ね」

「竜神……」

無頼げな新聞記者は単におもしろがっていたが、三星客船の専務はあきらかに鼻白んでいた。

「お蔭様で、この家には何も悪いことが起きませんの。押売や勧誘もほとんどきません。しつこいので有名な新興宗教の勧誘もお断りするだけですぐに引き取ってくださいませ。決してねばりません」

「なるほど……」

「よからぬ下心でおいでになるかたは、とつても恐ろしい目にあわれるようですわ。理由は何もないのに、心臓が締めつけられるように苦しくなって、冷汗がとめどもなく流れるのだそうです」

「いや、どうも……」

赤城専務は、胸ポケットから大きなハンカチを抜いて、抜け上がった額を拭いた。汗がじつとりと滲み出していた。「なにしろ、このお嬢ちゃんは、例のカタカムナ文明を発掘した榎崎皐月の再来といわれる超天才だから」

無頼記者が追従なのかおべんちゃらなのか、よくわからない無責任な口調でいった。

「十七才にして、四桁に上る特許を各国で取るわ、IQ800という信じがたい高知能の持ち主だわという「クリスタル・チャイルド」だから。超人的古代人カタカムナ人の再来なんだから、竜神様が守護神でも、ちつとも不思議じゃない」

「カタカムナ文明というと、ムーとかいう古代文明の……」

「しようちことなしに言葉を発して調子をあわせているが、赤城専務が何の興味も持ち合わせていないのは明白であった。心が萎なえているのか、目の動きに落ち着きがない。この場に自分が居合わせることで自体を後悔しているようだった。」

「ムーやアトランチスのような伝説ではなくて、超科学技術の文献がちゃんとあるのが、このカタカムナ文明でね」

「荒気記者が法螺ほらを吹いているのか、確信をもって真実を披瀝ひれきしているのか、だれにも判断はつかなかった。」

「あたし、カタカムナ文明のことは知りません」

「たまりかねて、由紀子がいう。」

「いろんな人たちが、カタカムナ文明と関係があるのかと尋ねますが、あたしは全然無関係なんです。その文献のことも、見たこともないし……」

「一度見れば、すぐに理解できるんじゃないかね。後藤由紀子ちゃんの超天才をもってすれば」

赤城専務は居心地悪げに、母親の亜由子が淹れた煎茶を飲んだ。器を把つかんでいる手が夥おほしい皺しわに被われ、肌は老人性の染みだらけで精気がなく、消耗度が大きいことを示していた。

「荒気くん。このへんでそろそろ用件に入りたいんだがね」

堪り兼ねたようにいった。荒気が無用な饒舌で時間を費やしていることに、苛立っていた。

「わかってます。カタカムナ文明の特徴は、現代人にない、卓越した直観力にあるんですよ。由紀子ちゃん、なぜ今日、われわれが訪問したか、もうきみにはちゃんとわかっているんじゃないのかい？」

「先日、玉姫山でお見掛けしましたから」

由紀子は、無頼記者荒気が、赤城専務の焦りを玩もてあそんで、たのしんでいるように感じていた。無頼記者の筋張ちようろうった、異形の顔立ちには、一種表現のむずかしい隠微な嘲弄ちようろうの趣きを感じられた。あからさまなものではないが、荒気は確かに今のこの状況全体を愉快なものと考えているようであつた。

「ああ。玉姫神社の護摩祈願。由紀子ちゃんも行ったの？」

「はい。あたしも行ってお祈りしてきました。母が 宮出身なんです。野神社の巫女をしていたことがあって……」

「それなら話が早い」

「それはまたありがたいお話で」

意気消沈していた赤城専務は、亀が甲羅から首を出すように背筋を延ばして、座り直していた。

\*

水晶の振り子が回り出すまでは、いつも軽い不安が付きまとう。

もしかすると、自分の裡に内在する「力」が去ってしまったっており、振り子がピクリとも動かないのではないか、そんな不安があるのだ。

動かなかつたら、どうしよう。「力」が離れ去ってしまったら、自分には何もなくなってしまふような気がする。後藤由紀子にとっては、自分の持ち合わせる「力」は、自前のものという実感が少しもない。いつもだれかに扶けられていているという気がするせいだ。

自分には、自前の「力」など皆無であつて、常に援助を受けている。その恩恵にあずかれなくなれば、自分はまったく平凡な少女そのものに戻ってしまうだろう。IQ800、という半ば冗談のような、高知能も、たとえば神様のような偉大な存在が授けてくれたものにすぎず、いつかは返さねばならぬ恩恵でしかないのである。

「野島崎沖に、〃さんらいず〃の船体は存在しません。何度試しても同じです」

「では、〃ちゃんらいず〃はどこにいるのかね？」

首を延ばして、由紀子の手元を覗き込み、息を詰めて見守っていた赤城専務が、喉の嚙しゃれた声で尋ねた。異常なまでの緊張が、その老躯の隅々にまで表れていた。

「今のやり方で、〃さんらいず〃の行方を探すことはでき

るのかね？」

「不可能ではないと思いますけど……」

由紀子は言い淀んだ。赤城専務の途轍も無い緊張感が転移してきたように、胸元が苦しく締めつけられるのを覚えた。まるで見えない巨大な掌でぎゅっと握りしめられるようであった。

「それでは、お願いしたい。それとも、何か躊躇するようなことでもあるのかね？」

「あたしは、こんなことをペンデュラムで調べるのは、初めてですから。こんなことをしていいのか、どうかわかりません」

「なぜだね？ 頼むから忘れないでくれ。〃さんらいず〃には六千名の乗客船員が乗っていて、今彼らの消息を知るすべもないのだよ。彼らの安否を気づかう声は、世界中に満ちている」

「一縷いちるの望みに縊すがる、そういうわけなんだよ、由紀子ちゃん」

荒気記者が聴き様によつては、軽薄にきこえる言い方をした。

「何十億の搜索費用を投じても、〃さんらいず〃を捜し出さなければならぬ。だが、それがそれこそ何箇月も、何年もかかるのでは、遅すぎる……専務はそういつておられるんだよ」

「それは、わかっていますけど。でも、やっぱりあたしに

は責任が重すぎます」

後藤由紀子は手にした水晶の振り子を、テーブルの上に置いた。深呼吸をしたい欲求が高まっていた。

「いや、是非ともお願いします」

赤城専務は、地肌が透けて見える白髪頭を、テーブルにすりつけて懇願した。その痛々しさに、由紀子は耐えられないものを感じた。板挟みの苦痛であった。眼前に、社会的地位も名誉もある老人が、尊大な自尊心を振り捨てて必死に哀願するさまを見るのは、情において見るに忍びなかった。

こんな時、由紀子は自分がどれほど世なれぬ、不器用な子供かを思い知らされた。母に助けを求めようとしても無駄であった。そんな時、母の亜由子は必ず姿を消してしまい、由紀子自身の決断に全てが委ねられるのだった。

「どうか、六千人の行方不明の乗客乗員の身を案ずる、家族や友人知己の気持ちをお考えください。彼らは『さんらいず』が消えて以来、眠れぬ夜をすでに半月以上にわたって過ごしているのです」

「でも、あたしには責任が重すぎます」

由紀子は懸命に抗弁した。決して責任逃れではないと思った。

「あたしの軽はずみな一言で、大変な結果が生まれると思うと、どうしても手が動きません。沢山の人々を右往左往させて、ぼうだいな搜索費用を無駄にする結果を生むかも

しれないんです。あたしには、とうていそんな自信はありません」

「しかし、今でも時々刻々、同じことが行われています。それも、何のあてもなく、大量の金と労力を、太平洋の深淵に投げ捨てるようなことがずっと行われ続けているんですよ。金も人手も惜しみはせん。だが、何の希望の光明もなく、無益にあてずっぽうの搜索を繰り返すのは、また別問題です。われわれ会社の人間だけでなく、すべての関係者の神経と肉体が参ってしまうのです」

年寄りの心労の苦しみが、伝わってきて、由紀子はいたまれなくなつた。命を縮めている苦しみである。老齡からいつても、いつ不帰の客になつたとしても不思議はないように思えた。きつと心臓が弱つてしまつているのだろう。「でも、どんな結果が出ても、あたしには責任が持てないんです。振り子の答えは、人間の予想を超えますから。どんなとんでもない、答えが出るかもしれないんです。振り子で占うには、問題が重大すぎます。あたし、こんなことに振り子を使いたくないんです」

「ほかに術策がないのです。霊感師にも占い師にも頼ろうとしました。有名な霊感者にも頼みました。しかし、駄目なのです。彼らの霊感はなにか壁のようなものに遮られているというのです。責任感のある、まっとうな霊感師ほど正直にそういいます。いい加減なお託宣は許されない、そういうのです」

赤城専務の口振りには苦悩が満ちていた。ぞつとするような荒廃の色が、みるみるうちに眼前の老人を、死者の国へ連れ去ってしまった。そう心地がして、由紀子は全身に鳥肌が立った。

「でも、あたしには、やっぱり……」

「やっつてご覧よ。『クリスタル・チャイルド』なんだから、由紀子ちゃん」

荒気の言い種はあくまでも、軽薄だった。

鳥肌を立たせる悪寒が身裡を這い、由紀子は固く目を閉じた。かえって悪寒が激しくなつて、慌てて目を大きく見開く。逃げ場のないコーナーに追い詰められたようだった。「最初にお断りしておきたいのですが、振り子は人間的な感情は持ちません。どんなに人間にとって残酷な答えになるとしても、振り子は躊躇わずに答えを率直に出します……」

由紀子は心を励まして、ともすればうわずりそうになる声音を抑え、はつきりといった。

「冷酷とも、非情とも思われるかもしれませんが、仕方ないんです。振り子が出すのは、事実だけをもたらす解答なんですから」

「わかっています。どんな結果であつても、受け入れる覚悟があります」

僅かの際に驚くほどの老人と化した赤城専務は、弱々しくいった。

「まるで、最初から結果が判っているような言い方をするね」

と、荒気が余計なことをいった。

「もしかすると、由紀子ちゃん、もう振り子で測定して、結果が判っているんじゃないのかい？ 吉が出るか、凶が出るか、というより、事実はどうに確定している。由紀子ちゃんにはもうそれがわかつているんだ。違うかい？」

「本当かね、それは?!」

赤城が血相を変えた。異常な興奮が、悪霊のように老人に取り憑いたようだった。

「もう結果が判っているのかね?! それならそれと、なぜ最初からいつてくれなかった?!」

「違います! 結果などぜんぜん判っていません!」

相手の剣幕に驚いて、由紀子はただかぶりを振った。埒もないいいがかりをつけられた怯えがあった。それほど相手の形相には恐ろしいものがあつたのだ。

「結果を教えてください、頼む! この通りだ!」

赤城専務が白髪頭をテーブルに擦り付ける。由紀子の全身にたとえようもない嫌悪感がひろがった。それは得体の知れぬ絶望感だった。

「あたし知りません! 振り子で“さんらいず”のことは何も測定なんかしていません! だから結果なんか何も知らないんです!」

立ち上がった由紀子の服の袖を、赤城が掴もうとした。

由紀子は悲鳴を上げそうになってあとずさった。

「頼む！ この通りだ！ この通り！」

「やっぱりあたしにはできません！ あんなに沢山の人の生き死にのことを、振り子で計るようなことは、やっぱりできません！」

荒気がしまったという貌をしているのが目に入った。自分の余計な雑言で、思い掛けぬ蹉跌さてつを迎えたことを悟ったらしい。

「あたしは 野の玉姫山に、〃さんらいず〃の無事を祈願に行きました！ 乗客乗員の皆さんの安全無事を祈っています！ でも、振り子を使つて、安易に〃さんらいず〃のことを占いたくありません！ あたしは靈感師でも占い師でもないんですから！ 申し訳ありませんけど、どうかお引き取りください！」

総毛立つ思いで、由紀子は部屋の扉を開けながら、気力を振り絞つて宣言した。年寄りが亡者のような古骨の腕を延ばして、掴みかかってくる恐怖があつた。赤城専務がこれ以上迫ってくれば、悲鳴を上げて逃げ出しそうな気がした。

「やれやれ、これではぶち壊した、専務。抑えて、抑えて」

新聞記者荒気が自分のことは棚に上げて、目がつり上がっている赤城専務をたしなめていた。由紀子はそつと扉を自分の背後に閉じた。激しく動悸どうきが打っていた。口の中が

乾いて熱かった。こんなに恐ろしい思いをしたのは久し振りだ、と思った。もう絶対に、ペンデュラムのことで、人が面会を求めてきても断る、と決心する。

確かにペンデュラムには、不可解な権威というものが存在する。それは一種の神的な権威である。人間の理知の力では及ばない、神秘の領域で、人間業でない正確な答えを教えてくれる。だが、それは他人に強制されてやることではない。

振り子の答えは、完全無欠ではないのだ。もし振り子の答えが外れれば、みすみす助かるはずの沢山の人命が失われることになるかもしれないのである。

いかに困った時の神頼みとはいえ、安易に振り子の答えに頼ることはできない。しかし、それは、由紀子が知らぬ間に、社会的につくり上げられてしまった虚像、まがまが「クリスタル・チャイルド」の虚名が、誘蛾灯の禍々しい光の蠱のように、蛾ならぬ人々を引き寄せている現実ゆえだった。扉の前に立ち竦すくむ由紀子の頬を虫が這う感触で、幾つも冷汗が転げ落ちて行った。

(続きは正式版でお楽しみください。)

e文庫 <http://www.ebunko.ne.jp>

地球樹の女神コア・ストーリー

# クリスタル・チャイルド

デジタル立ち読み版

発行日 2000年7月1日

著者 平井和正

イラスト 泉谷あゆみ

デザイン 伸童舎

協力 株式会社アスキー

発行 有限会社ルナテック

T125 0041

東京都葛飾区東金町3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI, AYUMI IZUMITANI,  
LUNATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。